　　　　　ぴとっ

　　　　　　　　　　　　　　　蜜瀬かえで　著

　いつもの放課後。

　いつもの帰り道。

　正門までの目抜き通りで。

「ね、玉置」

「何？」

　ぴと。

　指先に、張りのある頬の感触。

　玉置の肩を叩いたわたしの右手の人差し指が、玉置の頬にぴとっと当たっていて、

「えへへ～。じつはこれ、前から一度やってみたかったんだ」

　そうやって頬を緩ませるわたしに対し、玉置は、

「――ずるいっ」

　……へ？

「それ、あたしもずっとやってみたかったのに！」

　なんて、頬を膨らまされても……。

　というか、玉置もやったことなかったんだ、これ。

　意外。

「……じゃあ、やってみる？」

「いいのっ！」

　ただこれって普通、気づかれずにやるからこそおもしろいんだと思うんだけど……。

「じゃあ、あたし肩叩くから、そしたらこっち向いてね」

　玉置がいいならそれでいいんだけど……。

　『やるよ』って言われてやるのって、ちょっと変な感じ。

「それじゃー…………未佑っ」

「なあ――」

　『なあに』って言おうとした途中で、玉置の人差し指がわたしの頬に当たる。

「へへへ～」

　そして、得意満面の玉置の顔。

　それに思わず笑っちゃいそうになるのを堪えていると。

　わたしの頬を指で押しながら玉置が言った。

「未佑のほっぺって、なんか、フワフワしてるね」

「………。それって、わたしが太ってるってイミ？」

「違う違う！」

「……本当？」

「ほんとほんと！」

「……なら、いいけど」

　まあ、確かに、わたしのほうは玉置のほっぺ、これまでに何回か、こう、えーと、『触った』？　……『つまんだ』？

　そう。つまんだことがあって。

『わたしと違って、張りのあるきれいなほっぺだなぁ』

　なんて、うらやましく思うこともあったりするわけで。

　そう思ってみたら、

（む～）

「……。未佑、なんでさっきから無言であたしのほっぺた突っついてくるの？」

「…………。ずるいのはわたしじゃなくて、玉置のほうね」

「いきなりっ！？　てか、なんでっ」

　とか言いつつ、玉置も仕返しにわたしの頬を突っつき返してきて――。

「きゃっ、ちょっと、玉置っ」

「へへへ～、仕返し仕返し」

「もう。なら、わたしだって」

「ひゃうっ」

「――ぷっ。『ひゃうっ』だって」

「む～。もー、えいっ」

「きゃ。……やったわね～。えいっ」

「へへ～ん、当たらないよーだ」

「こら。避けるの禁止！」

　その日はそんなふうに二人して頬をつつき合って、正門でわかれるまでの道を歩いたのでした。

　日も長くなった夏の夕暮れ。